

## 国語

## 第1問 問5 (ii)

## 複数の文章を関連づけて考える設問で、各学力層で差がついた

## 結果分析

第1問 問5は、「ナッジ」について考察された二つの文章の主題を捉えつつ、複数テキストの関連を考える問題でした。(ii)は【文章I】と【文章II】で紹介されている考えの共通点・相違点を読み取っていく設問で、偏差値60~65の層でも正解率が4割程度にとどまっております。二つの文章の共通点・相違点を抽出・抽象化することができていないことがうかがえます。

## 指導のご提案

共通テストでは、異なる種類や分野の文章などを組み合わせた複数の題材による出題が見込まれます。このような問題では、それぞれの文章の論旨をきちんと捉えたいうえで、設問の指示に沿う形で情報を取り出し、関連づけていくことが求められます。

実践形式の類題演習のご提案ページへ

## 第1問 問5 (ii)

正解率	31.8%
SS70~75	67.7%
SS65~70	51.0%
SS60~65	38.8%
SS55~60	31.5%
SS50~55	28.8%
SS45~50	28.2%
SS45未満	28.2%

2023年度第1回ベネッセ・駿台  
大学入学共通テスト模試

「国語」

受験者数:	336,613人
平均点:	104.5点
標準偏差:	35.6

問5

次に示すのは、「文章I」と「文章II」を読んだ後の、話し合いの様子である。これを読んで、後の(i)~(ii)の問いに答えよ。

生徒A—健康的な生活をおくるべきだと思っけても、人間は先入観や直感に基づいて簡便な意思決定を行い、身体に良くない行動をとってしまう。人間が限定合理的な存在だとすると、健康維持には何らかの工夫が必要になるようだ。

生徒B—「文章I」では、が、個人の健康には有効だと述べているんだね。

生徒C—ナッジの活用は、個人の健康という観点だけではなく、社会全体の医療費抑制にもつながるかもしれないね。

生徒A—「文章I」の筆者の村山と「文章II」で紹介されているサンスティーンは、。

生徒B—「文章I」で説明されている通り、ナッジはパターナリズム(温情主義、介入主義)の側面を持つけれど、それだけではないということだね。

生徒A—一方、「文章II」の後半には、原文では「ナッジの責任」という小見出しが付いている。筆者の福原は、自由意思と責任という観点から、ナッジに関して問題を投げかけているんだね。

生徒C—福原は、。

(ii) 空欄 Y に入る発言として最も適当なものを、次の①~④のうちから一つ選べ。解答番号は 。

- ① ナッジを設計するにあたり、本人の自発性を重視すべきかどうかが対立している。村山は、パターナリズムの立場をとるサンスティーンの考えに異論を唱え、選択の余地を残すことで本人の意思を尊重すべきだと考えている。
- ② ナッジを「選択アーキテクチャ」と捉えている点では共通しているが、その利用範囲に関しては対立している。村山は、高ストレス状態に陥った場合など、理性的でない意思決定を、場面に限定して用いるべきだと考えている。
- ③ ナッジが意思決定に影響を与えることを是と捉え、推進していけばよいとする点で共通している。両者はともに、ナッジは選択の機会自体を奪うものではなく、そこでの選択は本人自身の決定だとみなしてよいと考えている。
- ④ ナッジを設計するにあたり、意思決定への介入は致し方ないとする点で共通している。両者はともに、ナッジは社会全体を望ましい方向へと導くものであるから、個人の自由を制限することもある程度は許容されると考えている。